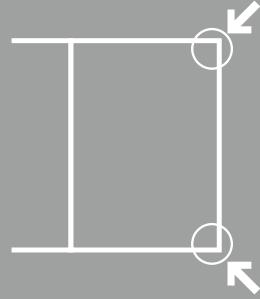
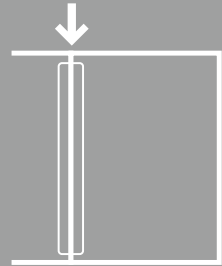


四隅 クリックでページ移動(全8ページ)



中央 クリックで全画面表示(再クリックで標準モードに復帰)




* OS・ブラウザのバージョン等により機能が制限される場合があります。

主体性を ひきだす リハビリテーション

教科書をめりかえた障害の人々

桜新町リハビリテーションクリニック院長 長谷川 幹 [著]



 日本医事新報社

脳梗塞, 重度な左半側空間無視, 左片麻痺 5年かけて介助歩行まで可能に

1 事例解説

<佐久間弘行 1934(昭和9)年生 男性>

●経過

- 1995年 7月 脳梗塞発病, 近医入院
- 10月 日産玉川病院転院
- 1996年 5月 退院し, 週1回外来通院
- 1998年 9月 桜新町リハビリテーションクリニック外来
- 1999年 6月 1人でお尻が拭けるようになった
- 12月 立位が自力で可能
- 2000年 3月 トイレまで介助歩行
- 4月 起き上がりが自力で可能
- 2001年 6月 自宅内の移動は実用的になる
- 8月 クーラーのリモコンを同じ位置に置くようになった
- 2002年 1月 ゴルフを立って練習

1995年7月, 脳梗塞を発病し近医入院(図1)。同年10月, 日産玉川病院(以下玉川病院)に転院した際, 坐位は介助を要し, 鼻腔栄養, 留置バルーンで全介助の状態。1996年5月, 退院した時, 食事は介助, トイレはオムツないし介助で, 夜はピストール(コンドーム式の採尿器)。退院後, 週1回の外来通院続行。同年12月, 近くの障害者センターで理学療法, 作業療法を週1回(約1年)実施した。

1998年9月, 桜新町リハビリテーションクリニック外来へ。左半側空間無視重~中等度, 左片麻痺重度(Brunnstrom stage II, II, II), 感覚障害は表在・深部ともほぼ脱失。起き上がりは時に可能, 坐位は可能, 歩行は理学療法士が重介助で1m(家族では無理)可能で, 週1回の理学療法を実施。10月, 山形・高畠旅行へ参加した。その後少しずつ変化し, 1999年1月, 奥様より「姿勢がよくなった, トイレ内の動きがよくなった」と報告があり, 立位保持が10秒可能となった。3月, 介助歩行は30m可能で, 左の振出しができた。4月, 奥様より「1人でベッドに腰掛けていた」と報告があった。6月, 奥様より「1人でお尻が拭けるようになった」との報告。10月, 歌舞伎座にて観劇。自宅です少しずつ介助歩行するようになった。12月, 立位保持が自力で可能となった。

2000年1月, 「こだまの会」(p76, 129)の新年会で「挨拶を立てやる」と, 立ち上がりの練習をしてできた。3月, トイレまで介助歩行ができた。9月には, 階段の練習

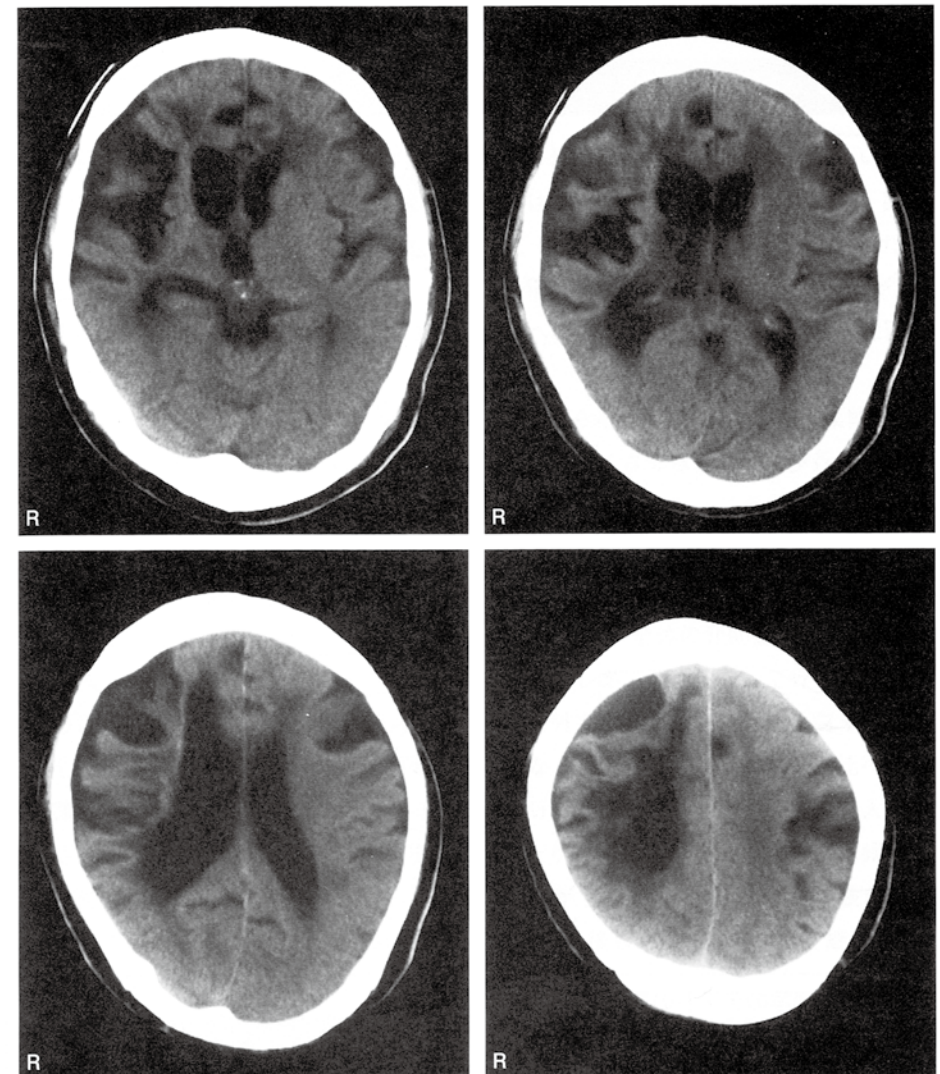


図1 ●CT(2002年)

ができるようになった。11月, 車椅子ダンスを見て, 夢を見た。

2001年4月, 多摩川癒しの会へ行った。6月, 自宅内の移動はほとんど歩行で可能となった。



1998年, 初めての山形旅行での宴会



2001年, 新年会の挨拶で立ち上がろうとしたとき

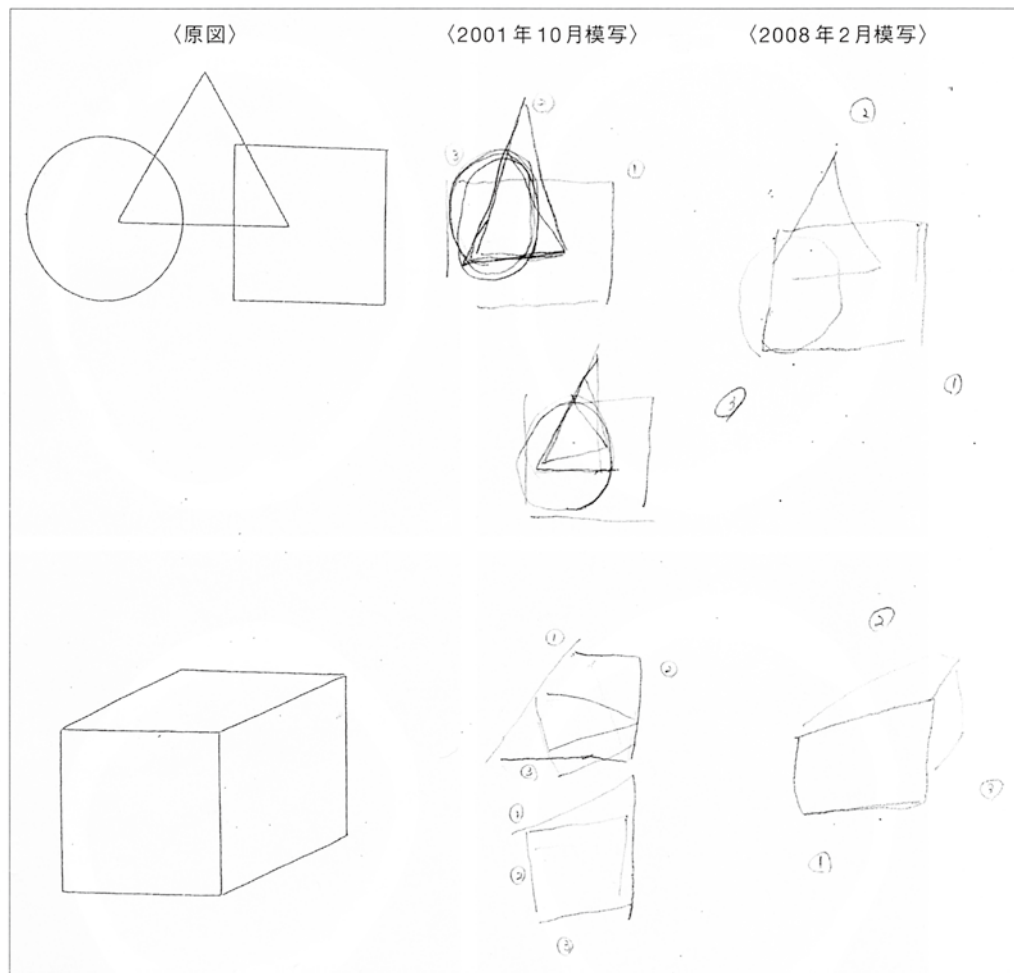


図2 ● 図形模写のテストの変化
(数字は書く順を示す)

この頃より、理学療法は隔週にした。次の目標は「ズボンの上げ下げを1人でできるように」であった。12月、時間の感覚が出てきて、これまでせかして催促していた夕食が待てるようになった。

2001年10月、図形模写テスト(図2)。

2002年1月、ゴルフを立って練習でき、100ヤード飛んだ。4月、左片麻痺(Brunnstrom stage III, II, III)、感覚(表在、深部)はほぼ脱失と運動麻痺が少し変化した。6月、理学療法は月1回へ。

2003年7月、近くの通所施設へ行くこ



2002年、診察室での立位場面

とになり、外来理学療法は終了(その後問題のあるとき、外来)。

理学療法経過

中島鈴美

重度の左片麻痺に加えて、左半側空間無視、注意障害、感覚障害も重度という状態でした。外来開始時は起き上がりや坐位はなんとか自力で可能でしたが、高次脳機能障害の影響で、反対側の過剰な努力、また動作時の左側への注意に欠け、筋緊張も高まり動作を困難にしていました。発症から3年経過はしていましたが、再度、起き上がり、坐位など基本動作で左側への加重など感覚入力を中心に練習を進めました。

開始から6カ月経過した頃(1999年春、発病から4年弱)から、腰部の柔軟性、坐位などのバランスがよくなり、立位が誘導しやすくなるなど徐々に歩行に向けての準備ができ、1年後、介助歩行が10~20m程度可能になってきました。本人からも、わずかながら「加重している感覚がわかる」などの発言もありました。自宅でもトイレへの移乗が1人でできるなど状態が変わってきました。

外来開始から1年半後、立位はつかまれば安定し、全体の介助量も軽くなり、家族との介助歩行も数メートル可能になり、トイレまで介助で歩いて行けるようになっていました。その後、隔週、月1回へと外来理学療法を変更し、フォローしていましたが、ご家族からの自宅での様子などの話から、当初の状態に比べて落ちついてご本人に対応されている印象を受けていました。体調が悪くなり入院されたとき、頻度を増やすことも提案しましたが、家族は「なんとかかな」と頻度は変えない選択をされたことから、そのことがうかがえ、これまでの体験から出た言葉だと思います。通所リハビリに移行した後も、月1回の利用を継続し、立位練習、介助歩行を行っていました。

理学療法では坐位、立ち上がりに必要な腰部の柔軟性、腹部の緊張を高めること、左下肢の随意性促通、立ち上がり、立位での左右下肢への加重を長期にわたり積み重ね歩行練習を進めました。重度の高次機能障害を合併していましたが、家族との介助歩行が実用的になるまで、開始から数年、発症から5年を要し、自宅でのトイレ動作や移乗動作につながったことは大きかったと思います。あきらめずに長期にわたるかわりが必要であったと考えさせられました。

この経過は、故 楠美 裕さんの記録を参考にさせていただきました。

2 インタビュー

<2008年6月>

◎ストレッチャーで玉川病院へ、いきなり「立ってみる」で立てた

【長谷川】発病からは。

【佐久間・妻】7月で満13年です。

【長谷川】ほぼ13年。最初入院されたのは。

【佐久間・妻】平成7年の7月14日です。

【長谷川】〇〇病院から玉川病院でしたか。

【佐久間・妻】そうなのです。最初、救急車を呼ぼうと思ったら、佐久間が糖尿病でかかっていて、ろれつが回らないのにさかんに言う〇〇病院に行ったほうがいいと思って連れて行ったのです。

そこでわりあいすぐにリハビリの病院へと言われたので、△△病院が近いから希望したのです。でも、そのとき嚥下障害で管が入っていて、導尿で管が入っていて、握力もゼロでした。

【長谷川】管が入っていたんですね。

【佐久間・妻】そうなのです。会議で受け入れ不可能と△△病院で言われてしまって、でも、そのときのケースワーカーの方から、「玉川病院だったらこの程度の重症でも長期にわたって受け入れてくれる」と聞き、病院で手配してもらい、ストレッチャーに乗って行ったのです。

【長谷川】ストレッチャーで来たのですね。

【佐久間・妻】そう、それを長谷川先生が「立ってみろ」とおっしゃったのです。私も母も、ストレッチャーで行って、普段車椅子もろくに乗っていないのに、立てるはずがないと思って「先生は何をおっしゃっているのかな」という感じだったのです。そうしたら先生が立たせてくれたのです。佐久間が立ったのですよ。私と母は感動しちゃって、泣いちゃって、それで先生が「よし、やってみよう」とおっしゃったのです。それからもう先生は私たちの神様になっちゃったの。本当にあのときはうれしかったです。

【長谷川】佐久間さんはその日のことを覚えていますか。

【佐久間】うっすらと覚えています。

【長谷川】最初に外来に来たとき、入院したときのことは覚えていますか。

【佐久間】覚えてません。

【長谷川】玉川病院のときは、あまり覚えていないですか。

【佐久間】あまり覚えていないですね。

【長谷川】玉川病院に来たのが、7月に発病して10月頃ですね。退院したのは。

【佐久間・妻】翌年の5月です。

◎退院後の家での歩行練習

【長谷川】退院した頃は、佐久間さんご自身は覚えていますか。

【佐久間】はい、覚えています。

【長谷川】その頃は歩く練習はしていませんか。

【佐久間】していません。

【佐久間・妻】してたじゃない。中島先生(理学療法士)と。

【佐久間】中島先生か。

【長谷川】歩く練習はしていたのだけれども、家に帰ってから、歩くことは、すぐはできていないでしょう。

【佐久間・妻】できてないです。週に1度、玉川病院の外来に通ってやっているだけでした。

【長谷川】病院で歩く練習をしているだけで、家では基本的に車椅子ですね。それで、途中で歩くことをやるようになった時期はなかったのですか。

【佐久間・妻】いや、それは桜新町リハビリテーションクリニック(著者の開業)に行っただけのところが本格的に。

【長谷川】桜新町リハビリテーションクリニックは98年ですよ。だから3年が過ぎていますね。そのときも、週に1回来ていましたね。

【佐久間・妻】行っていました。96年12月から近くの障害者センターに週1回理学療法、作業療法に1年通いました。

【長谷川】歩行練習をやっている、家で歩行をやることはあったのですか。

【佐久間・妻】先生のところで左の足送りをしながらやっているのを私が見て、まねをして、外から帰ってきたときに、家の中に入る何mかを一生懸命私もやったのです。そうしたらできるようになって、先生の所に行ったときにも何回か左足が前に出たのです。私はもしかしたらいけるかなと思うほどになったのですけれども、結局、もう意欲というか、自分から率先してやる気持は欠けていましたからね。

【長谷川】奥様が誘導しながら、どのぐらいやられたのですか。

【佐久間・妻】私は佐久間が倒れたときに働いていたから、そのまま継続して働いていたのです。中島先生には「お仕事を辞めることはできないの？」みたいなことをそれとなく聞かれたのに、私にしたら仕事が楽しくてしょうがなかったから、辞められなかったのです。母がいたから、母に任せただけですね。あとヘルパーさんの力を借りて、ヘルパーさんたちは見守りで、リハビリはなしで。でも、保健所から週に1回来て、廊下で立ったり座ったりはやっていたのです。

【長谷川】実際に、家で歩行を奥様と一緒にやり出したのは、3年を過ぎてからですね。

【佐久間・妻】そうですね。私が会社を辞めてからです。

【長谷川】最近では、歩行ができないですね。いつ頃からできなくなっていますか。

【佐久間・妻】私が2年半前頸椎を悪くしてから、やめてしまったのです。

【長谷川】ということは、発病から5年後ぐらいから、10年ぐらいまでの間はやっていたのです。家の中で歩く場面は。

【佐久間・妻】デイサービスから帰って昇降機で上がってきたときに、そこで杖を持って、足送りしながらトイレまで歩いて行って、トイレで用を足して、それからそこで車椅子に乗ってというようにしていたのです。

【長谷川】60代のときは歩くことはやっていたわけですか。実際歩くことをやっていたとき、最近3年ぐらい歩かなくなり、日常生活に差はありますか。

【佐久間・妻】違ってきますね。今は私力が弱いから、廊下のところまで車椅子で入っ

てきて、そこで立たせて、室内用と外出用の車椅子を交換するのですけれども、「立ってね」と言って室内用に替える間でも、腰を下ろしてしまうのです。怖いですよ。ずっと立っていてくれない。

【長谷川】年齢は70歳ぐらいだから、そのへんの機能的なことが変わってきた。立つことが落ちてきたということですね。

【佐久間・妻】落ちてきました。

◎入院中に家が新築

【長谷川】わかりました。次に、佐久間さんは退院した頃のことは覚えていますか。

【佐久間】覚えています。

【長谷川】どういうことを覚えていますか。

【佐久間】私が出てきたら、この家を建て替えたので、前の家が完全になくなっていたのですよ。

【長谷川】退院したときは、古い家を新築に替えた。

【佐久間】はい。

【長谷川】では、家に帰ってびっくりしたのではないですか。

【佐久間】びっくりしました。話は聞いていましたけれども。

【長谷川】話は聞いていたけれども、帰ったら家が替わっていた。そういうことで覚えていらっしゃるのですね。

【佐久間】はい。

【佐久間・妻】ちゃんと先生の顔を見て話さない。結局、私も家を直さなくてはいけないというのを知らなかったら、△△病院で、「リハビリのできる状態でないのに転院してきても、次の病院へは行けず、そのまま家に帰るしかない」と言われたのです。その上で、「家のほうの受け入れ体制はできていますか」と言われて、びっくりしました。「夫は車椅子の生活になる」と言われて、そのときに初めて、家をなんとかしなくてはと思ったのです。



インタビューしているときに、右側に顔面が向くことが多い(著者撮影)

【長谷川】替えようということになったのですね。それで、実際に生活されて、左片麻痺などいろいろあって、自分では、治そうと思うじゃないですか。でも、なかなか治らないと感じる時期はありましたか。

【佐久間】ありました。

◎簡単に治るものじゃないとの思いを受けとめるには

【長谷川】そう簡単に治るものじゃないなと思われたのは、いつ頃なのですか。

【佐久間】倒れて3年ぐらい経ってからでしょうか。

【長谷川】そのときの気持はどうでしたか。

【佐久間】もうショックでした。本当に悲しくて。

【長谷川】は一ん。それで、どのように心の整理をされたのですか。

【佐久間】ちょっと記憶がないですね。

【長谷川】奥様はいかがですか。

【佐久間・妻】ある意味、上手に開き直ったのではないかという気はしましたね。私が、「やる気がなくて」と言うのと「やる気の本は二子玉川に置いてきてしまったから」とか、上手に切り替えたのではないかと思った。

【長谷川】今ご主人は3年ぐらいとおっしゃったのだけれども、奥さんの中でどうでした。もうちょっとよくなるんじゃないかと。

【佐久間・妻】私はよくなったと思いましたね。最初のときがひどかったから。車椅子も背中のでかいので、時にはおでこと車椅子が結んであって、いったいどうなるのかという思いでいたので、どんどんよくなってきたという思いが強かったですね。先生があるとき、「月単位で結果を見ないで、年単位で見なさい」とおっしゃったのです。その言葉がズンと来て、月単位だとわりあい進歩は少ないけれども、年単位だと本当に変化していて。それで、先生が「目標は」とおっしゃったら、佐久間は「トイレを自分で始末したい」と言ったのです。そのときに私は感動して、いつも平気でやらせているのが、やはり自分でしたいという、プライドがあったのがうれしかったのです。でも、結局上手にできなくて、手伝ってやるようになりましたけれども。そういう気持を持ったことは、すごくうれしかったです。

【長谷川】どうですか、ご主人、今の話は。それは覚えていますか。

【佐久間】そんな細かいことは覚えていません。

【長谷川】そうですか。本人としては3年ぐらい経って、これはちょっと治らないなと思って悲しかったし、奥様側から見ると最初の頃のことがあるから。

【佐久間・妻】思ったより全然変わりました。

【長谷川】変わったという感じなわけですね。でも、本人は最初の頃は覚えていないですものね。玉川病院にストレッチャーで来たこともね。

【佐久間】はい。

【長谷川】その差があるのですね。

【佐久間・妻】でも、あの当時はいろいろ覚えていて何か。

【長谷川】そうですね。そのときはいろいろ話をしているけど、あとから振り返ると忘れている人はけっこういらっしゃいます。

【佐久間・妻】そうなのですか。

【長谷川】インタビューしていると、最初の数年間は覚えていない人がいます。

【佐久間・妻】玉川病院に行く前に、受け入れてもらえないといけなからと言って、足